

Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol. 5

2015年3月31日発行

講演会 in 知床

「地域資源を生かしたまちづくり・人づくり」

2015.3.15 (日) ゆめホール知床 会議室1

知 床自然大学院大学設立財団は、2015年3月15日(日)、斜里町のゆめホール知床で、講演会 in 知床「地域資源を生かしたまちづくり・人づくり」を開催しました。地元での講演会開催は2年ぶり2回目。約50人の住民の方にご来場いただきました。

北海道大学観光学高等研究センター教授・知床世界遺産エコツアーリズム検討会議座長の敷田麻実さんの講演は、知床の未来を考える上で重要な視点がたくさん含まれており、とても有意義な時間になったと思います。関係各位の多大なるご協力に感謝申し上げます。

(詳細を2～7ページに掲載いたします)



プログラム

講演：「知床における地域資源活用戦略」

敷田 麻実 氏 北海道大学観光学高等研究センター教授・知床世界遺産エコツアーリズム検討会議座長

提案：「知床の地域資源を生かした人づくり」

田中 俊次 知床自然大学院大学設立財団代表理事・東京農業大学名誉教授
午来 昌 元斜里町長

報告：「知床自然大学院大学計画のあらまし」

中川 元 知床自然大学院大学設立財団業務執行理事

■ イベントから組織化、まちづくりへ ■

ところで、まちづくりにはスケール感があります。必要な時間と参加する人、その影響する範囲で整理してみました。

皆さんが地域を豊かにしたい、活性化させたいと考えるときに、最初にやるのは「イベント」です。これは1日だけのことが多いし、関係する人もイベントをやる人だけでよいので、簡単です。例えば今日の講演会もイベントの部類に入ります。最初の段階としてよく好まれる活動です。しかし、イベントを連続してするには組織を作る必要があります。毎回関係者が集まってイベントをするのは大変だからです。そのため、例えば地域の協会や協議会、実行委員会が作られます。これが第2段階で、「組織化」という動きです。観光分野では観光協会などがその役目を担っています。組織化できるとイベントは連続して効率的にやれますが、組織の維持にお金や手間がかかるので、もう少し長期的に考えようではないかということになります。それが「地域マネジメント」の段階です。



■ 「地域資源戦略」とは？ ■

まず、「資源」とは「人の役に立つもの」です。知床は資源が豊かだと紹介がありましたが、それは「使えるものがある」ということです。地域にある資源＝地域資源なのですが、法律や制度の中では、何でも地域資源と呼ばれています。農業用水や自然環境、棚田を含む美しい景観、伝統文化、生物多様性と、地域にあるものほとんど全部が資源化されます。

次に、「戦略」とは、「結果がどうなっても仕方がない」をやめて、自分で考えて見通しを立てることで、少なくとも見通しを持って何かをするのが、戦略がある状態です。仕方がないをやめて、将来の採算や、やりくりを考えることが戦略だと思ってください。

今日のテーマ「地域資源戦略」は、資源をやりくりし、もくろみを持って地域を考えることです。とりえず豊かな資源があるから使えばいい、という発想をやめることです。これは知床のように、豊かな資源があるところでは、よりいっそう考えなければいけないことだと思います。

■ 直接消費からイメージ消費へ ■

今日の結論としてお話しするのは、資源の使い方の問題です。資源の使い方には3つのステップがあり、一番簡単な使い方は「直接消費」です。知床には素晴らしい自然や生態系があるから、それを直接観光客に見せ、野生生物を観察してもらうような使い方です。野生生物観察とか、野生生物との出会い体験のようなものが、直接消費してもらうやり方です。

しかし、直接消費には限界があります。いくらエゾシカがたくさんいても、いつもエゾシカに遭遇できるとは限りません。季節性がありますし、チャンスがいつもあるとは限らな

自然資源の文化的利用

直接消費	イメージ消費	背景的消费
<ul style="list-style-type: none"> 地域にある資源をそのまま資源として利用(消費)する 野生生物観察 	<ul style="list-style-type: none"> 資源を直接消費せずに、その意味だけをイメージに変換して利用 野生生物による環境教育 	<ul style="list-style-type: none"> イメージを別の目的のための背景として利用する。 店頭のカマの製菓

参考: 熊野新美(2014)「自然資源の文化的活用」(2014年11月)、「熊野新美(2014)「自然資源の文化的活用」(2014年11月)、「熊野新美(2014)「自然資源の文化的活用」(2014年11月)」

いのです。またヒグマに出会うチャンスもそうはありません。ヒグマに出会いたいなら観光船に乗ってもらうなどの場所の制約もできます。

そこで、もう少し効率よく資源を使えないかということになります。それは「イメージ消費」です。知床が持っている自然をイメージに変換して消費してもらうことです。写真を撮って売ることもその例です。展示施設でヒグマの絵や写真があるのは、ヒグマを消費しているのではなく、知床が持っているヒグマの存在をイメージとして消費してもらっているわけです。

しかし、それが更に進むと、背景の消費になります。北海道には店の前にヒグマの剥製を置いているところがありますが、これは北海道にいるヒグマを説明しているのではなく、PRしたいのはお店の方です。ヒグマを「背景」に使っている「背景消費」です。

知床でうまくやらなければいけないのは、イメージ消費の段階でいかに資源を使うかということです。背景として消費されると、使うのが素晴らしい自然であれば、知床でなくてもいいとなります。

いや、そんな恐れがあるのなら、直接消費でいいのではないかと思われるかもしれませんが。しかし直接消費は効率が非常に悪い。また経済的にも多くの価値を生めません。また直接使うので、自然環境負荷も大きいのです。このように、上手にイメージ消費を膨らませていくこと、自然の持つ付加価値を拡張することが資源戦略では重要です。

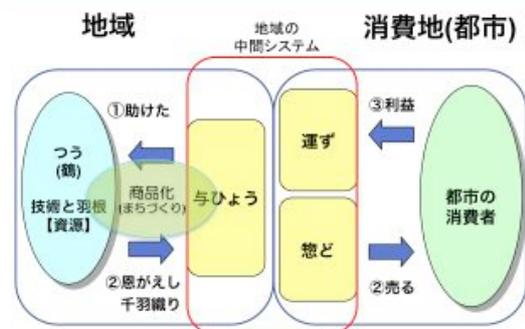
■ 戯曲「夕鶴」から見た地域づくりの本質 ■

まちづくりが何かということを理解するうえで、お手本となるたとえ話があります。それは皆さんがよく知っている戯曲「夕鶴」です。それでは、夕鶴、鶴の恩返しのお話を思い出しながら考えてみてください。

夕鶴は農夫である「与ひょう」が鶴を助けることから始まる物語です。与ひょうに助けられた鶴は、「つう」という人間に姿を変えて与ひょうの元にやってきます。与ひょうは、つうが千羽織を織ることをたいそう喜び、街に売りに行きます。しかし千羽織が売れると、与ひょうは人が変わってしまいます。つうに千羽織をどんどん織らせ、売って儲けようとするのです。またそこに「運ず」と「惣土」という商人が介入して、販売を拡張し、よけいにつうを苦しめていくのです。

この話は、現代の地域づくりにも通ずる意味を持っています。つうという「資源」と与ひょうという「資源利用者」の関係を描いているからです。与ひょうはつうの織った千羽織が売れることがわかると、つうに増産を強いてしまいました。しかし資源であるつうに還元することはなく、つうは疲弊していきます。最後には、与ひょうがつうの千羽織の製造現場を覗いて破綻するのですが、人が欲望に負けて資源を使いつくす、自分の幸せを追求して、資源には還元しないなど、地域資源を使う際の教訓が読み取れる物語です。ぜひこの「夕鶴」から地域資源の使い方を学んでいただければと思います。

「夕鶴」にみるまちづくりの仕組み



上記の「中間システム」を含むモデルは、藤原 康夫・水野 聡子・藤倉 昌之(2009)「鶴見地域がバリエーションにおける関係性モデルと中間システムの分析—北海道道庁中期・長期計画(2015)の事例から—」『地域政策研究』17, pp. 68-72pから転載し一部改変し作成した。

夕鶴からの教訓

- 地域だけでは成り立たない
- マーケットと出会う与ひょう
- そこには関係者が現れる
- 殿様御用達でブランド化した千羽織
- 市場の圧力が強い
- 再投資ができなかった与ひょう
- 資源の崩壊を招いた

■ 30年先を見越し、再投資のサイクルを ■

時間の長さは地域づくりでいつも話題になります。3年後に豊かになっていけばいいのか、10年後か、30年後か。これは皆さんの年齢によっても違うと思います。私の年齢になりますと30年は実感として理解できますが、若年層の方だと、今日、明日良くならないうと、給料が上がらないうとだめだというふうに、時間が短いかもしれません。

実は何年くらいで地域づくりをやるかというのは、戦略にとって大きな意味があります。私がお伝えしたいのは、おそらくその時間の長さは、10年から30年くらいだということです。なぜそんなに長くかかるのか、明日食えばぐれたら困るという意見はもちろんあります。しかし、今までに地域づくりで評価されたところを見ますと、30年くらいが多いです。例えばここの近くですと、霧多布湿原（浜中町）の地域再生があります。また徳島県の神山町、私たちはここ3年くらいで成果をあげたと考えがちですが、実は活動が始まったのは30年前です。私たちは評価された地域づくりを見ると、すごいスピードで実現したように考えますが、実は30年くらいかかっています。30年間をうまく乗り切ったところが、最終的に評価を得ているのが現実だと思います。

こう考えますと、私たちが持つ戦略は30年くらい、もしくは10～30年くらいの時間を考えつつ、今日、明日を生きるための日銭を稼ぐということです。この日銭とは得られた利益のことで、これを再投資できれば、30年後に評価されるまちづくりは難しくないはず。ところが、この日銭を全部今の豊かな暮らしに使えば再投資できないし、資源の状態も変わらない。直接利用しないうと、資源の枯渇や破壊を招いてしまうでしょう。

知床には豊かな資源があります。しかし、文化的な利用、つまり直接よりもイメージとして資源を使いたい人は増えています。このマーケットの状況を考えれば、知床は大きな資源利用の転換点にきているのではないのでしょうか。地域の側は、なぜすばらしい知床の自然資源を使ってくれないのか、と考えていると思います。しかし、使う側はもっと豊かな使い方をしたい、付加価値がついた使い方をしたいと思っているはず。資源をどう使い、得た利益を地域の資源に再投資できるか。このサイクルを作り上げることが、30年先を見越した地域資源の戦略ではないかと思っています。

■ 質疑応答 ■

大変わかりやすいお話をお聞かせいただきまして、ありがとうございます。地域資源のいろいろな要素が先ほど紹介されていましたが、その中で人材というのは、地域資源としてどのように考えられるのか、そのあたりのことをもうちょっとお聞かせ願います。

ちょうど説明が抜けていた点を、質問いただいてありがとうございます。人材も地域資源です。人材というよりも、人材の持っている能力というのが地域資源だと考えることができます。

あまりいい例ではないのですが、インドネシアで大津波があったときに、早い時期に欧米の支援が入った地域と、入らなかった地域の差がつかまりました。何の差だったと思いますか。

英語が話せる人がいたか、いなかったかの差です。英語が話せる人がいた集落は、早くに欧米の支援が入りました。いい悪いはありますが、いなかったところは、残念ながら時間がかかったという報告があります。このように人が持っている技能も資源になります。

技能でも人材育成ということで補強ができる。再投資もできます。再投資というのはお金だけではなく、教育機会、学習機会をつくるということです。学習機会をつくるということは、地域にとって効果的な再投資になります。

ただデメリットもひとつあります。人は「利口になる」とそれを生かすために都会に行きたがります。せっかく投資した資源が都会に流れていってしまいます。教育をするだけではなく、地域との接着、地域には皆さんが育った大事な場所、心の場所なのだとして刷り込まない限りは、利口になった人から都会に行きます。そういうことは日本の多くの地域が経験してきたので、それを防ぐ手だてをしながら、教育として地域で再投資をするということが、人と資源とを考えたときの一番いい選択肢だと思います。

「知床の資源を生かした人づくり」

午来 昌 ・ 田中 俊次

■ 午来 昌 (元斜里町長)



この頃は時間がありましたので、斜里町史を読み返していました。特に第一巻は知床半島の歴史が細かく記されています。サハリンからカムチャッカ半島、知床半島にいたるまで、縄文人からアイヌ民族、いろいろな民族の方が暮らしてきた歴史の足跡が改めてすごいと感じています。その民族の方々は自分たちの欲得ではなく、自然の中に畏敬の念を込めながら、しっかり大地を守ってきたのです。

知床を世界遺産にするには12年かかりました。町のポリシーとして絶対あきらめてはいけないことでした。特に羅臼の方々の協力がなければ実現しませんでした。多くの人の協力で描いた夢が実現したのです。そういうことから言えば、今、私たちは、世界自然遺産を土台に何を発信していけるかが問われています。

私たちは知床自然大学院大学をつくらうとしています。地域資源を生かすには1にも2にも人の感性だと思います。未来に何を残せるか。先住民族の方々が数千年かけて守ってきた歴史があります。若い世代に知床をそっくり残してやるのがいかに大事か。また農林漁業、観光業、商工業の暮らしの現場に学生を送って、その実体験の中から新たな世界観を生み出してもらうことがどんなに大事か。これもしみじみと感じています。みんなのため、地域のため、それが世界のためになるのだと考えていけば実現できるだろうと、その思いだけは捨てずに頑張っていますので、どうか一つ、皆さんにもご理解いただければうれしいです。

■ 田中 俊次 (知床自然大学院大学設立財団代表理事・東京農業大学名誉教授)



東京農大で長く教育に携わってきた身として、この地域の豊かな資源を生かして人材を育成することができればという思いでこの事業に参加しています。

この地域は世界遺産という非常に豊かな自然があると同時に、日本有数の農漁業を基幹産業とする町でもあります。両方とも年間100億を超える生産額。そうなるとうちでも保全か、開発かという問題や、クマ、シカの問題が出てきますね。

これは今、日本全国で頻出している問題です。これに今対処しているのは専門家ではなく町や市の職員が多いです。一生懸命、専門家に教えてもらい、泥縄式に対処しています。対処の仕方によっては新たな問題が出ることもあり、放っておくと大変なことになります。だからといって、このような課題を解決する専門家の教育機関は今までありませんでした。それを知床で作らなければならないと考えます。

下世話な話ですが、小さくともこの大学院大学ができれば、流入人口、交流人口が増えます。世界中から一流の研究者が来ます。町にお金が落ちます。あくまで概算ですが、年間4～7億円の経済効果が考えられます。お金だけでなく、何と言っても街の雰囲気が変わります。若い人が街を歩くと活気が出ます。卒業生にとっては第2のふるさとになるでしょう。地域が抱えている課題を共に考え、解決することも考えられるなど、さまざまな可能性を持った機関です。皆さんも期待していただいて、ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

「知床自然大学院大学計画のあらまし」

中川 元



私たちが進めている知床自然大学院大学構想のベースになっているのは、斜里町が平成22年に設置した「知床自然大学構想づくり協議会」が策定し、平成25年に町に提案した「知床自然大学院大学構想（案）」です。ここで提案された基本理念や目的を踏まえて、より具体的な計画案を専門家によって構成された知床自然大学院大学計画策定専門委員会が現在策定を進めています。

1.趣旨・目的

自然と人間との共存を図り、地域資源の保全と活用による持続可能な地域社会を実現できる専門職の配置と、その養成が求められています。野生生物と人間社会との軋轢を解決し共存策を担う専門家を、多様な自然環境を持ち保護管理の先進地である知床の現場で養成するため、大学院に相当する高等教育研究機関（知床大学院大学）を設立します。

2.知床に設立する意義

世界自然遺産に登録された知床は、豊かな自然生態系と生物多様性が保存されており、我が国で最も進んだ保護管理策が展開されています。自然資源と人的資源に恵まれ、経験の蓄積とネットワークのある保護管理の現場「知床」が、専門職養成の場として最も適していると考えます。

3.設立を目指す大学院の概要

- ①形態：専門職大学院（1 研究科-1 専攻-2 分野）とする。「専門職大学院」は、高度専門職業人の養成に目的を特化した課程として平成15年に創設された。
- ②運営：学校法人による運営とするが、関連大学との連携や共同運営、誘致の可能性も模索。
- ③場所：中心施設（校舎・寄宿舎等）及び実習施設を知床地域に設置する。
- ④実習・研究フィールド：知床世界遺産地域のほか、知床半島や周辺地域の自然公園・保護区、農林漁業地域等。対象エリアは中心施設から100km圏、及び国内外の関係地域も想定する。
- ⑤研究科名・専攻名（仮称）：地域資源保全学研究科・地域資源保全学専攻。
- ⑥分野名（2 分野・仮称）：野生生物保護管理技術分野・地域資源保全政策分野。
- ⑦期間及び学位：修業年限2ヶ年、修士（専門職）。
- ⑧規模：学生定員を1学年20～30名、専任教員8名（実務家教員を含む）程度を想定。
- ⑨受入学生：環境保全や野生生物と人間との共存に関心を持ち、ワイルドライフマネジメントの専門職を目指す学生、社会人、留学生を受け入れる。社会人は自治体や国、企業団体の現職職員も想定。
- ⑩教育内容：知床をフィールドに実践的なトレーニングを行い、高度な専門知識と専門技術を身につける。加えてファシリテーション能力や、新たな環境価値・地域価値を創造する能力を養い、地域の実情に即した問題解決にあたる人材を養成する。また、専門性を示す資格の創設を検討する。
- ⑪卒業生の進路：地方自治体や国の野生生物担当者、専門行政官、環境NGOや環境系法人の専門職員、企業・団体の環境マネジメント部門。
- ⑫設立資金：企業や個人の寄付金による
- ⑬運営資金：学生納付金、私学助成金のほか、企業や個人の寄付金・賛助金による。

この「大学院計画のあらまし」は現在策定作業を進めている段階のもので確定した計画ではありません。今後、具体的計画をさらに煮詰めるとともに、設立資金の確保と文科省への設立認可申請へ向けた準備を進めます。そして平成29年（2017年）の開校を目指します。皆様のご理解とご支援をお願いいたします。また、当設立財団の活動は支援をいただいている多くの企業・個人の寄付金や賛助会員で成り立っています。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

知床の地域資源 Q & A 第1回

知床自然大学院大学は、地域資源を大切にしながら持続可能な社会を実現する専門家の養成を目標としています。知床の地域資源は豊かな自然環境や野生生物、大地と海が支える農林漁業、それをベースにした加工業や観光業などさまざまなものがあります。ここではクイズ形式で、知床の地域資源について解説します。知床についてよく知っている人も、実はよく知らないという人も、気軽にチャレンジしてみてください！第1回目は世界自然遺産についてです。

Q：知床が世界自然遺産に登録されたのはなぜ？当てはまらない理由を選んでください。

- 1、美しく雄大な景観が素晴らしいから
- 2、特異な生態系があるから
- 3、生物多様性を保全できる自然生息地があるから



A：当てはまらないのは 1、美しく雄大な景観が素晴らしいから です。

知床の景観は素晴らしくないの！？と思った皆さん。そんなことはありません！知床連山やホーツク海など、知床の景観は美しく雄大です。しかしながら（残念ながら？）、世界自然遺産に登録された理由は他の2つにありました。2005年7月に世界自然遺産に登録された知床。南アフリカ共和国のダーバンで開催された第29回世界遺産委員会において、該当するクライテリア（登録基準）は以下のとおりとされました。

クライテリア (ii) 「生態系」

・知床は北半球で最も低緯度に位置する季節海水域であり、季節海水の形成による影響を大きく受け、特異な生態系の生産性が見られるとともに、海洋生態系と陸上生態系の相互関係の顕著な見本である。

クライテリア (iv) 「生物多様性」

・知床は多くの海洋性及び陸上性の種にとって特に重要であり、これらの中にはシマフクロウやシレットコスミレなど多くの希少種が含まれている。

・知床は多くのサケ科魚類、トドや鯨類などの海棲哺乳類にとって世界的に重要である。

・知床は世界的に希少な海鳥類の生息地として重要であるとともに、渡り鳥類にとって世界的に重要な地域である。

世界遺産委員会では、知床は北半球における流水の南限であり、そこからもたらされる恵みが海から陸へとつながる生態系に影響を与えていることを大きく評価しています。またシマフクロウやシレットコスミレなど希少種、サケ科魚類やトド、クジラ類、海鳥類など多くの生物にとって、知床は重要な生息地であると示されています。

ただ、この自然環境を次代に繋げていくためには多くの問題があり、地域では行政や住民が一緒になって課題に取り組んでいます。知床にはそんな「人」の魅力もあると思います。

■ 第3回大学計画策定専門委員会を開催しました

日時：平成27年3月9日（月） 14：00～17：00

場所：北海道立道民活動センターかでの2.7（札幌市）

出席者は委員9名、オブザーバー1名。

知床自然大学院大学計画案の策定について、第2回委員会の検討結果を踏まえて、大学院の具体的内容について議論したほか、受け入れる学生や養成する能力、社会の要請等についてさらに議論を深め、目指すべき大学院像をより具体化しました。また、認可申請の前に必要な準備等も検討しました。



■ 平成26年度第4回理事会を開催しました

日時：平成27年3月22日（日） 13：00～15：30

場所：ゆめホール知床 会議室2（斜里町）

出席理事は8名。平成27年度事業計画案、平成27年度収支予算案を承認しました。また、第3回大学計画策定専門委員会の概要や「講演会 in 知床」の開催概要報告、寄付金募集活動等について議論を行いました。

■ ブログ、Facebookでも発信しています！

知床自然大学院大学設立財団は、公式ブログ、Facebookページでも各種情報を発信しています。

●ブログ：http://blogs.yahoo.co.jp/u_shiretoko

●Facebook：<https://www.facebook.com/pages/公益財団法人-知床自然大学院大学設立財団/192028480936317?ref=stream>



知床自然大学院大学設立財団に関するお知らせのほか、知床の自然情報なども随時アップしています。ぜひご覧下さい。

第5回国際野生動物管理学術会議 (IWMC) が札幌で開催されます

会期：2015年7月26日(日)～30日(木)

会場：札幌コンベンションセンター(札幌市白石区東札幌6-1)



アメリカ野生動物学会と日本哺乳類学会の共催で、アジア初開催となります。アジア地域では絶滅に瀕している野生動物が多い一方、動物と住民との軋轢が生じている地域が少なくありません。世界の研究者が集い、野生動物と人間との共存をどのように維持していくのかを考える国際学会です。

会議の中で知床に関するシンポジウムも開かれます。会議終了後にも、国外研究者が知床視察に訪れます。知床自然大学院大学が目指す教育・研究を考える上でも有意義な機会ですので、関係する多くの皆様の参加をお願いいたします。会議の内容や参加申し込みは、右記のウェブサイトをご参照ください。<http://www.iwmc2015.org/>

知床自然大学院大学設立財団は、

活動を支援してくださる 賛助会員、寄附金 を募集しています

会員の皆様におかれましては、新年度(2015年度)分の会費納入をお願いします

(会員の年度は4月1日～3月31日です)

■賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです。

■会員の年会費

個人会員：5,000円

団体会員：10,000円

法人会員：20,000円

法人特別会員：100,000円

※年度ごとの納入となります。

■加入申し込み方法

パンフレット付属の「払込取扱票」と「申込書」をご使用ください。(パンフレットご希望の方は、下記事務局までご連絡ください)

■賛助会員の特典

当財団のニュースレター、講演会やセミナーの案内情報を優先的にお送りします。

■寄附金について

寄附金も随時募集しています。

賛助会員加入同様にお申し込みください。

■主な入金口座について

ゆうちょ銀行 記号 19940 (普) 10138691

(※他の金融機関から 店名九九八 番号 1013869)

北洋銀行斜里支店 店番 452 (普) 3119440

北海道銀行斜里支店 店番 904 (普) 0530326

網走信金斜里支店 店番 003 (普) 0284957

大地みらい信金羅臼支店 店番 003 (普) 1072873

※賛助会員、寄附金の申込書は当財団ホームページからもダウンロードできます

設立財団ニュースレター 第5号

発行 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団

〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10

TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

Web <http://www.shiretoko-u.jp>

発行日 2015年3月31日

本誌掲載記事・写真などの無断転載をお断りします。